４．　中年期危機を体験した元オリンピック選手の競技引退に伴うアイデンティティ再体制化

はじめに

競技引退に直面したアスリートは，競技に傾倒(commitment)してきた生活の中で「何を」「どのように」獲得してきたのかを問い直さなければならなくなる．それは，彼らのそれまでの歩みそのものを根本から揺るがす深刻な発達的危機(developmental crisis)となるかもしれない．そして，そこでの体験は「アスリートではない新たな自分」を確立していくための礎となり，ひいては，彼らのその後の人生を大きく左右するであろうことはいうまでもない．

他にも，この種の問題に焦点を当てた研究は，これまでにいくつか行われている．カナダの元トップアスリート(28名)を対象として探索的なインタビュー調査を実施した Werthner ら[22]は，スポーツ競技からの移行を特徴づける要因を同定し，競技引退の直後には，彼らがある程度の困難さを体験したことを指摘した．その中で，競技引退に関連した適応問題の多くが，アスリート自身が競技に対して自律的な関わりを持てずにいたことに起因すると主張した．

Grove ら[7]は，元オーストラリア代表選手(48名)を対象として，引退時のアスリートとしてのアイデンティティ(athletic identity)とキャリア移行(career transition)に際して利用した対処方略との関連を明らかにした．そこでは，引退時のアスリートとしてのアイデンティティの強さが，適応に要した時間，情緒的適応，社会的適応，キャリア設計，対キャリア決定不安と有意に関連していることが指摘された．また，引退時にアスリートとしてのアイデンティティが強い場合，キャリア移行過程において，感情表出，精神的怠惰，行動的怠惰，防衛依存などの対処方略を利用しやすく，物理的・情緒的サポートを求めたり達成行動を抑制するなどの行動特性が認められた．

また，Underleider[20]は，合衆国代表として1963年ベルリン大会から1992年バルセロナ大会に参加した元オリンピック選手の中で，特にメダリスト 57 名に対してインタビュー調査を実施した．そこで得られた資料からの伝記的記述(biographical sketch)に基づくと，23名（40%）が競技から職場への移行に際して，ある程度もしくは深刻な困難さを体験したと報告している．彼らは，アスリートとしてのアイデンティティを維持するために，職業に関する知識や広範囲に及ぶライフスキル，家族や仲間のサポートを無視していた．そのために，彼らは，競技引退に際して，もはやアスリートではなくなってしまうことを認めるのが困難であり，また，引退後の生活に対して，情緒的にも知的にも，身体的にも準備できていなかった．

これらの研究報告は，アスリートとしてのアイデンティティが強固であればあるほど，競技引退に伴って問題を呈しやすいことを示唆している．つまり，競技という単一領域に対しての傾倒(singular commitment)が引退後の適応過程に負の効果をもたらすことを指摘した．

Erikson[4]は，「アイデンティティ形成は，青年期に始まり終わるというものではなく(中略)その大半が一生涯を通じて続く無意識的な発達的プロセスである」としており，成人期・中年期に至ってもアイデンティティは発達・深化していくものとされる[14][21]．そして，Marcia[10]は，このErikson の理論的概念を実証的に検証する意図から，意思決定期間と役割の試みという「危機(crisis)」と重要な領域に対する「積極的関与もしくは傾倒(commitment)」という２つの心理社会的要因に注目し，アイデンティティ・ステイタスを４つに類型化した．これらを参考にして，岡本

[13)14)]は，一般の健康な中年男女を対象とした研究の中で，中年期の心理的変化の体験と青年期以降のアイデンティティの発達経路を分析した．そこでは，40代を中心とする中年期が，自己の有限性の自覚を契機に引き起こされるアイデンティティ危機であることが確認されている．また，そこで体験されるアイデンティティ再体制化には，①身体感覚の変化の認識に伴う危機期 → ②自分の再吟味と再方向づけへの模索期 → ③軌道修正・軌道転換期 → ④アイデンティティ再確立期，という共通のプロセスが認められた．更に，岡本[15)]は，青年期のアイデンティティ確立が未達成や不十分であった場合，中年期のアイデンティティ危機はより深刻な形で現れ，より徹底したアイデンティティ再体制化が求められるとしている．

アスリートの場合に置き換えてみると，彼らが競技引退を経て社会生活に適応していくプロセスは，青年期を通じて獲得してきた「アスリートとしての自分」を一旦解体し，再吟味し，「新たな自分」を編成していくというアイデンティティ再体制化（identity reconfirmation）に他ならない．そこには，彼らが競技引退に対して「体力の衰え（生産力の低下）」や彼らを取り巻く「環境の変化（社会的地位の変化）」，「転職（キャリア移行）」などといった心理社会的変化を体験しているところから，いわゆる「中年期危機」と類似した心性[15)]が存在し，これが彼らには早くに訪れているとも考えられる．

このようなことを念頭に置くと，アスリートが競技引退を経て新しい社会生活に移行する際には，　より迅速に新しい環境に移行することよりも，充実したアイデンティティ再体制化を果たしていくことが第一義とされるべきであろう．なぜならば，競技実践から新たな社会生活への移行がスムーズであっても，充分な課題解決を伴っていない場合，その後に解決困難で深刻なる問題を招きかねないと予測されるからである．

さて，それでは，競技引退を通じてより充実したアイデンティティ再体制化を体験していくために，アスリートには何が求められるべきなのだろうか．

豊田ら[17)]は，引退して３年以上を経過した元アマチュア・アスリートを対象とし，アイデンティティ再体制化の観点から類型化を行った．そこでは，引退後の社会生活に対する適応問題に影響すると予測された心理的要因を取り上げ，各タイプの特徴を明らかにした．その中で，特に，社会化予期と将来展望が，引退後の社会生活への積極的な関わりを規定する要因であることを確認した．つまり，これ以上競技を継続することができないことに予め気づくことと，引退後の人生設計において具体的な計画を立てることが，引退後の社会生活に対する適応に大きく寄与していた．しかし，この報告では，この２つの要因の有無を確認するに止まっており，その詳細な検討を加えてはいない．

ところで，引退後の社会生活に対する適応問題において専門的介入の確立が求められている現状を考慮すると，具体的な介入方略を想定した要因の同定が不可欠であるといえる[6)11)]．ここでは，特に，社会化予期と時間的展望に注目し，これに関して個人が辿ったプロセスを詳細に分析することにした．ここでは，社会化予期を「競技を継続できないことへの気づき」と定義づけ，時間的展望を「ある一定時期における見通し」とした．

ちなみに，本研究では，豊田ら[17)]の設定した将来展望を時間的展望に含まれる概念として扱っている．Lewin[9)]は，これを「ある一定時期における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」としており，アイデンティティ再体制化に際しては，「これまでの自分（過去）」を吟味し，「今後の自分（未来）」を見据えつつ，「今ある自分（現在）」に取り組んでいくことが求められると想定された．

また，アスリートが引退後の社会に適応していくプロセスはまさに力動的であり，これに関連する体験について多くの情報を含む事例を詳細に検討していくことで，個人の直面した問題を浮き

彫りにし，その時の彼らの内面により一層深く迫ることができると考えられた．

ここでは，まず，元アスリートが競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関連してどのようなプロセスを歩んだのかを明らかにし，次に，競技引退に伴って体験した社会化予期と時間的展望がアイデンティティ再体制化をどのように特徴づけるのかを明らかにする．そして，そこでの体験が，その後の人生においてどのような影響を及ぼすのかについて，事例を通じて検討する．

4-1. 方 法

調査対象：オリンピック代表としての競技経歴を持つ元アスリート(２名)

調査期間：1997 年 12 月　1998 年 8 月

調査内容：インタビュー内容は，時間的経過に従って彼らが体験した主要なエピソードを取り上げるように配慮し，半構造化面接(約 50 分×7 回）を実施した．そこでは，いつ，どのような行動レベルでの変化を起こし，それを彼らがどのように受け止めたのかなどについての会話を，本人に承諾を求め，カセットテープに収録した．また，インタビュー初回時には，ライフライン(図１・２参照)の作成を求めた．

4-2. 事例提示

1) 事例提示の仕方

本研究は，２事例について報告する．まず，事例の概略並びに調査時点で記入されたライフライン（図１・２参照）を掲載した．そして，競技に傾倒していた競技期，引退のきっかけとなる出来事から実際に競技引退を迎えるまでの移行期，引退後の社会生活を含む再適応期という時間的経過に配慮しながら事例を提示した．また，事例中に示される「　」には，当事者の逐語を示した．ちなみに，事例提示については対象者に承諾を得た後，論文掲載に至っている．

2) 事例Ａ

「現役復帰を果たした元オリンピック選手」

Ａの概略：オリンピック金メダリスト．メダル獲得後，競技引退を迎え，大手企業に就職し，20 年間勤続した．その後，知人の紹介により退社し，事業を起こし，独立を果たした．しかしながら，これに失敗し，多大な責務を負う．そして，その失墜の思いの中，40代半ばにして，再び現役アスリートに復帰した．調査時点においては，社会的信頼の回復を目指して，様々な職務をこなしていた（図１参照）．

競 技 期：自営業の父親と母親の間に３人兄弟の末っ子として生まれたＡは，生来，負けず嫌いの性分が強かったという．ものごころついた頃から病床にあった父親が無類の格闘好きであったことが，Ａが競技を始めるきっかけと思われる．父親をこよなく慕っていたＡは，知らず知らずのうちに「日本の国技である柔道」を，いつか自分もやりたいと思うようになっていた．

中学に入学する直前に，長男である兄が死去する．「よし，兄貴の分まで俺が頑張ってやる！」と幼心に考えたという．中学在籍時に黒帯を取得．「兄も持っていましたからね...なんか，兄に近づけたような感じがしてね...父親も喜んでくれました」と，これが当時何よりも嬉しい出来事であった．

高校入学と同時に競技を転向した．それは，柔道で世に名を馳せるには小柄では困難が大き過ぎすぎると自分で判断してのことであった．また，この頃のＡの家庭の経済状況は芳しくなく，父親の闘病生活を母親の収入だけでは支えていけないため，Ａは毎朝，家業の手伝いをしながら家計に一役かっていた．当時は「反骨精神っていうのかな...貧しさ故に誰にも負けたくはないという気持ちが強かった...」としていた．ちなみに，この家計の一助と思って始めた手伝いが，競技力向上

に

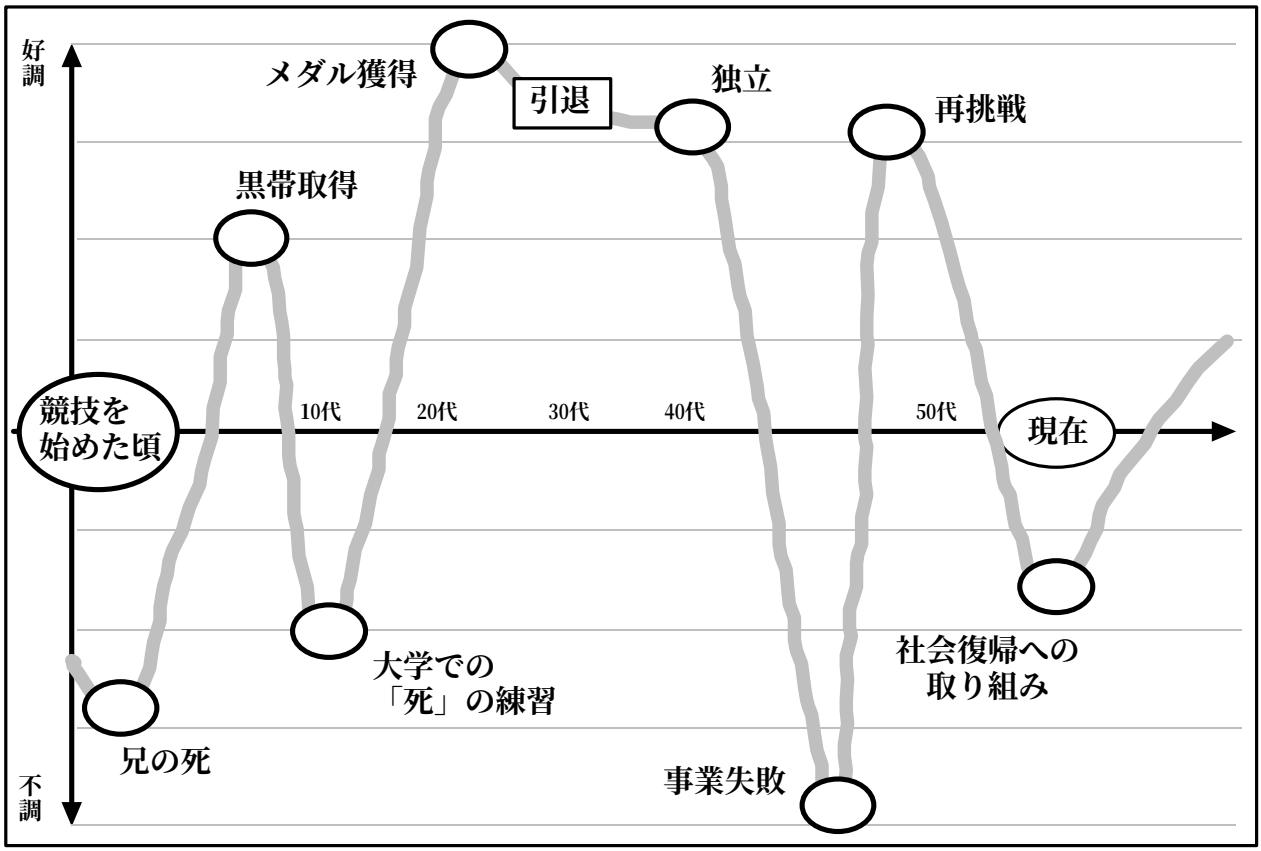

図１：事例Aのライフライン

功を奏する結果を生んでいた．「石臼をひく，この微妙な力の入れ具合」が競技に生かされていたのである．

Aが高校１年生の時，衝撃的な出来事を迎えた．それは，同じ故郷の出身者がAの取り組む種目でオリンピック金メダルを獲得したことを新聞で知らされたことであった．「よし！俺もやってやろう」とこの頃からオリンピック出場を朧気ながら目標とし，競技に取り組み始めたという．その後，どんな苦しい練習に対してもこの目標が何よりの支えとなっていった．

「もちろん強くなりたかったから...」と大学進学は競技環境を優先し，進路先を選んだ．そこは当時師事するコーチの母校であり，「知らず知らずのうちにそこに行くんだと考えるようになっていた...」．学費は，二番目の兄の好意に甘える形となったが「競技をやりたい．オリンピックで金メダルを」という気持ちが何よりも強かった．下級生時代は，とにかく「毎日，殺されるかと思うくらいの辛い練習」を繰り返した．そんな中で，１度目のオリンピック選考会を迎える．しかし，怪我のためにこの大会を途中辞退してしまった．周囲も自身もその実力たるや充分代表級に匹敵していたと信じていただけに，「怪我さえなければきっと（オリンピックに）行ってたに違いない」「残念で...悔しくて...」仕方がなかった．「とにかく，落ち込んでいる暇はない」と直ぐに切り替えて，次のオリンピック出場へ向けての取り組みを開始した．「動物園のライオンとにらめっこをしたり，ラジオのボリュームを最大にして，その中で集中力を高めようと練習したり...勝つためには何でもやった」と，その甲斐あって，この４年後にオリンピック出場を果たし，悲願の金メダルを獲得した．この時Aは，既に大学を卒業し，１年半が経過していた．

移行期：オリンピックへの出場権を得た頃から，Aは「メダルを取ったら引退しよう」と心に決めていた．「有終の美を飾るっていう訳じゃないけれど，辞めると決めたら，益々燃えてきた...」と，メダル獲得を目標として，尚一層，練習に傾倒していった．そして，金メダルを獲得した直後，Aは大手企業に就職を果たした．

競技の特色として「30 歳前後に最盛期を迎える」とされる．競技関係者は「次回のオリンピック大会でも充分メダルを狙える」とAの競技継続を疑わなかった．しかし，その意に反して，Aは第一線で競技を続けることばかりでなく，競技との関わり合いまでも絶つという決断を下した．マスコミもこぞって「早すぎる引退」と書き立てた．Aは，金メダルを獲得するまで，将来のことをあれこれ考えたことはなかったという．

「金メダルを取るという目標に向けて生活の全てを捧げてきた」ということからも伺われるように，金メダルの目標を達成する前に，自分の引退後の生活について思いを巡らせることはなかった．　そして，目標とする金メダル獲得が達成された時に，「競技が嫌になったのではない...金メダリストとして恥じることのないような生活を送らねば」「俺は(金メダルという）看板を背負ってるんだから...」という気持ちが湧いてきたという．これには尊敬する先輩の「競技で金メダルを取ったのだから，仕事でも金メダルを...」「一度，金メダルを取ったのだから，２度も３度もやるもんじゃない...」というアドバイスが大きく関与していた．ちなみに，この先輩もまた，金メダル獲得という偉業を成し遂げていた．彼はメダル獲得直後，潔く競技引退を迎え，社会人としての道を歩みだし，理事職にまで上りつめた経歴を有しており，いつしかAは「先輩のような人生を歩めたら...」と，自分と彼との影を重ね併せるようになっていた．金メダリストという知名度は絶大であり，また，「尊敬する先輩がいたので...」という理由から，難なく就職を果たす．そこでは営業部に配属されることになり，「金メダリストだから周囲に負けるわけにはいかない」との強い気持ちから，昼夜の別なく，仕事に打ち込んだという．「ただただ，仕事を頑張ればいいと思った．人生の見通しなんて何一つなかった」「あの時が一番

良かったんじゃないかな」と懐かしそうに当時を振り返っていた．

再適応期：取引先の社長の次女と 26 歳で結婚し，二人の娘をもうけた．仕事は順調を極め，社内でのステイタスも時の経過と共に向上していった．「先輩と同じように上役にも就けそうな勢いがあった」と，当時は全てがうまくいっているように感じられ，「有頂天になっていた」という．

勤続 10 年目を過ぎた頃，突然，先輩の死去を迎えた．先述したように，Aにとって彼の存在が大きな意味をもっていた．彼の死去により「俺は一体，この先どうすればいいんだ」と自己の存在意義に疑問を持ち始めるようになった．そして，勤続 20 年目を迎えた秋に，知人の紹介から会社を設立し，独自に事業を興した．「先輩だったら，こんな時，どうしたかな？」と考えた末の決断であったが，「成功したいという気持ちが先走り，物事の本質を見極めてはいなかった...それが失敗につながった」と今となっては後悔している．独立直後は，「金メダルのAさん」と言って周囲に人が集まるようになり，仕事は直ぐに軌道に乗って，全ては順調であるかのように思われた．しかし，１年も経たないうちに事業に失敗し，多大な責務を負うことになった．「今まで寄ってきた人たちが皆私の元から離れていった」「今までの仕事は，私自身が仕事に努力した成果ではなく，単なる金メダルの副産物に過ぎなかったのではないか...？」と疑心暗鬼に陥った．間もなく，離婚．２人の娘も引き取られていった．

孤独に苛まれ，社会復帰を目指しながら悶々とした生活の中，ふと思いついたのが競技への現役復帰であった．40 代半ばにして「競技しか残っていなかった」ことが，本人が立ち直るための一助となっていったのである．「原点に戻りたかった」とのことから取り組み始めた二度目の競技生活は，20年もの長いブランクを少しずつ埋めていく作業であり，第一線での試合に耐えうる肉体を取り戻すには過酷を極めた．まさに「死の挑戦」と呼ぶに相応しいほど壮絶であった．このことは，当時のマスコミや世間を大いに騒がせた．「これをやり遂げなくちゃ，生きている意味がない．なんとしてでも貫き通そう」と，そこで掲げた目標はやはり「オリンピック出場」であった．結局は，もう一歩のところで出場権を逃してしまったものの，周囲からこの偉業に対する賞賛の声が高まっていった．こうしてAは「もう一度社会人としてやり直せる」という自信を取り戻していったのである．

現在は，「一社会人としての信頼をなんとか回復したい」「自分にだって何か人の役に立つことが出きるはずだ」という意思が強く，複数の会社の手伝いをしながら生計を立てている．「やはり金メダルの効果が絶大でね」と仕事の契約時には現地に出向き，金メダルを持参し相手を接待するという．「事業に失敗したときは，金メダリストであることが邪魔で仕方なかった．でも，今では大いに利用していますよ．これも私ですからね」と，その職務内容にも今では充分満足しているようである．「死ぬまで挑戦ですね...でも，挑戦は勝たなくちゃ意味がない...」との決意から，「もう一度，社会で活躍したい...(金メダリストという）看板を背負ってるからね...一からの出直しですよ...」と社会復帰へ向けて意気込んでいる．

3) 事例Ｂ

「再就職を余儀なくされた元オリンピック選手」

Ｂの概略：日本記録保持者であり，その記録は未だ国内では破られてはいない．オリンピック出場経験があり，当時，国内では常に敵なしと評された．大学卒業後，大手企業に就職し，３年間現役選手を続けた．競技引退を迎え，30年間の勤続の後，社内にてトラブルを起こす．これにより再就職を余儀なくされた．調査時点では，新しい会社への転職を果たしてはいたものの，充実感に乏しく，いわゆる「失業鬱」[8]の中にあった（図２参照）．

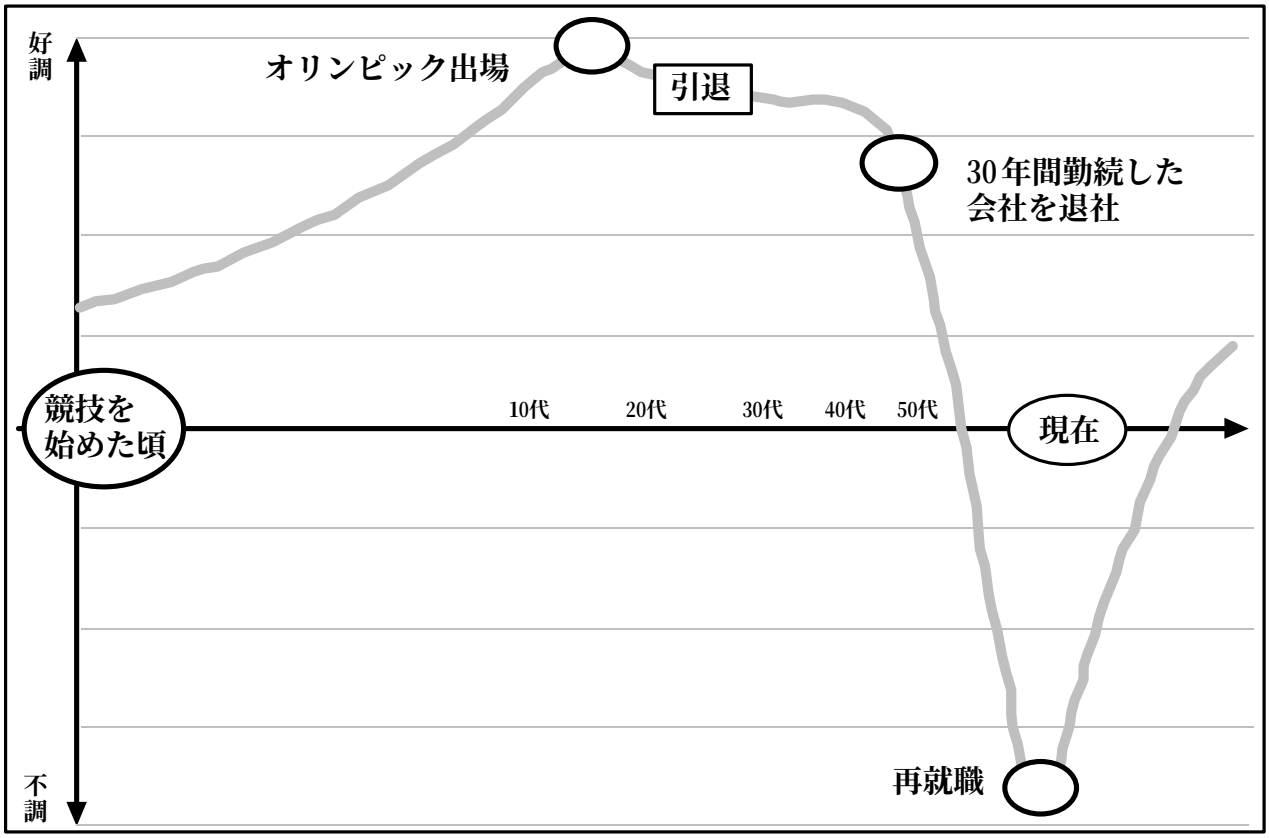

図２：事例Ｂのライフライン

競技期：Bは，厳格な父親とこれに服従する母親という家長絶対の家族構成の中で育てられた．姉弟は，姉，B，弟の３人で，Bが最も父親に可愛がられていたと回想する．小学校高学年では陸上競技に取り組み，全国大会に出場したこともあった．この時，投てき種目で５位に入賞し，陸上競技関係者の目に止まったこともあった．中学在籍中の３年間，全国大会では常連であり，その恵まれた才能に陸上選手としての将来が嘱望されていた．しかし，その後，高校入学と同時に競技種目を転向した．これには，父親に「お前はこれをやれ」と言われ，嫌々ながら転向せざるを得なかったという体験が含まれている．その頃の父親の印象は「とにかく怖い存在でしたね...とにかくやるだけでした」とした．

取り組みはじめてみて「当時は競技人口も少なく，オリンピックに行くにはこれしかないと思った」ことから，競技に傾倒していった．協会の支援体制も強力であり，Bを大器とみなすや否や毎週末，専任コーチを送り込み，指導を徹底したようである．その甲斐あって，短時間に実力もメキメキ伸びていった．「練習メニューは与えられるモノであって，自分で考えてやろうなんて微塵も考えなかった」と，当時は，コーチから与えられる練習メニューをこなすことに徹していた．

ある雪の降る日，毎日の苦しい練習に嫌気が差し，練習シューズをわざと忘れて練習場に向かった．「受験勉強にも取りかかりたかったし，軽い気持ちでやった」のだったが，練習できないことを申し出たとき，コーチに大目玉を喰らった．「もう辞めてしまえ！」と怒鳴られ，雪の積もったグラウンドを裸足で何十周も走らされた．「とんでもないことをしてしまった」ととても反省し，それから競技への傾倒は益々強まっていったようである．

大学進学も競技環境を優先して進路先を決定した．「他の大学からも誘いがあったのだが，当時のコーチの出身校であったことが選択の大きな理由」とした．これと期を同じくして，念願のオリンピック出場を果たす．そして，大会本番の２週間前に，日本新記録を塗り替えるという離れ業をやってのけた．取り組み始めて４年目の快挙に，マスコミや競技関係者など周囲の期待は高まっていった．当時，このような前例はなく，さらに，その記録は 30 年以上経った現在でも破られてはいない．しかし，周囲の期待とは裏腹に，オリンピック大会本番は敢えなく予選落ちに終わってしまった．Bは，緊張のあまり前日に風邪をひき，高熱が下がらぬまま本番に臨んでいた．「試合を終えるだけで精一杯．勝とう！なんて考えられなかった...出場するだけで精一杯」と当時を振り返る．その頃の自分を振り返ると「最後の詰めが甘いというか...それを何度も繰り返してしまっている」と反省の念に絶えない．しかし「オリンピックに出ることが目標」であったことから，当時は相当満足していた．その後の大学４年間も競技における華々しい活躍と共に過ぎていった．

大学生活も終盤に差し掛かり，いよいよ就職に取り組む時期を迎えたが，ここでも競技環境を最優先した．しかし，自らが積極的に就職先を探したを訳ではなく，「就職はいわば裏口入学だったね」というのも，その選定を父親に一任し，競技継続に全力を費やしていた．こうして職務に就き，会社側の競技に対する理解を支えとして，「企業人」と「競技者」という二足の草鞋を履きつつ，３年間を過ごしていった．

移行期：２度目のオリンピック大会の代表選考会は，就職の問題が持ち上がる直前に行われた．「当然負けるはずがない」「自分よりも強い奴なんていない」「必ずオリンピックに行けるだろう」と周囲もB自身も信じて疑わなかった．しかし，まさかの惨敗を喫し，敢えなく出場権を逸してしまった．「こんなに頑張って(オリンピックに）出られないんだったら，もうやっていても仕方がない」と当時は大変落ち込んだ．「それまで就職のことなんて，考えたこともなかった」のが，この予想もしなかった大敗をきっかけにして，急

に，気になりはじめたという．しかし，直ぐに競技実践の場を離れようとは思わなかった．１週間ほど悩んで「就職なんて(父親に) 任せておけば何とでもなる」「このまま(競技を) 終わるのも癪にさわる．国内タイトルを制覇しよう」と，再び競技目標の追求を中心とする生活に戻った．そして，より一層競技に傾倒していった．

ある時，職場の上司から「スポーツじゃ飯は喰えないぞ...」というアドバイスを受けた．まだまだ国内では充分トップクラスの競技力を有していたが，Bは「これ以上続ける訳にはいかないな」と，これを契機に競技引退を具体的に考えるようになっていったという．その２年後に，思惑通り国内タイトルを制覇するに至った．そして，このことを区切りとして，シーズン終了と同時に競技引退を迎えた．この時，「やっと終わった．嫌々やっていたところもある．何とかしてけじめをつけたいと思っていたから，良いけじめになった」と，少なからずの安堵を感じたという．同時に，お見合いを通じて結婚に至り，４人の子供をもうた．

再適応期：引退後の生活を具体的に見通すことなく，新たな生活が開始された．「とにかく与えられた仕事を一生懸命こなす」ことに没頭した．

職務の傍らコーチ業にも勤しんだ．「家族のことを省みなかった」と，15年間は日本代表級などの後進を熱心に指導した．「職場に迷惑をかけないこと」がコーチとしての信条であり，実際，特別待遇で会社を休み，遠征試合に出かけたことはほとんどない．「私の思う通りの選手になることで強くなる... 」と強調し，「コーチの言う通りに実行する...記録が伸びる...選手はコーチを信頼する... それが勝つ秘訣...」としていた．

会社での働きぶりも目を見張るものがあった．「フェアーな会社だと思って，いけないと思うことにはハッキリ反論した」「競技での知名度が高かったから契約時にはそれも利用した」ことから，会社でのステイタスは上昇していったようである．当時，「○○会社のB」ということが誇りであり，周囲からもその仕事に対する敏腕ぶりには高い評価を受けていたようである．しかし，その反面で「強引に片づけた仕事も多く，そのために社内に敵もいっぱい作ってしまった...」「気づいたときには，どうしようもないくらい孤立していた」と，この頃には「社内での人間関係の歯車が全くズレていた」という．「このことが後に迎える大きな問題につながっていたね」と，少なからず後悔していた．

50 代半ばに会社の上司との些細なトラブルが発展し，30年間勤続した愛着ある会社を退社せねばならなくなった．「会社にいられなくなってしまった」と，再就職を余儀なくされた．

大学の OB から「どこにも行くところがなければ，うち(の会社) にこないか」と誘われ，現在の職場に移ってきた．「職種が違うから宇宙人と話をしているみたいだ」と，現状に対する不満は募るばかりで「この会社は，自分に何も求めてはいないし，自分も会社に何も求めていない」「やる気が起こらない．今が人生最大のスランプ」としており，いわゆる「失業鬱」の状態にある．競技への未練は残っていますか？との問いかけに，「いやいや...競技に燃えて...あの会社でもう一度燃えた...そんな人生を送るはずだったんだがね...」と応えていた．

4-3. 討 議

ここで挙げた２つの事例は，様々な観点から理解することが可能であるが，ここでは，1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス，2) 社会化予期と時間的展望について，3) 競技引退体験が中年期危機に与えた影響，という３点に絞って論ずることにしたい．

1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス

両者は，競技引退を経て，その後の社会生活への移行は極めてスムーズであったと判断できる．

Aの場合，競技に取り組み始めた当初から「オリンピック出場」という目標を定めており，それからのプロセスは，まさに「アスリートとしての自分」を確立していくプロセスであったといえる．そして，尊敬する先輩から「仕事でも金メダルを」というアドバイスを受け，「金メダルを取ったら引退しよう」と決意をした．こうして「金メダル獲得」の目標が達成された直後に競技引退を迎えた．その後，大手企業に就職しており，そこでは，競技引退を通じて【アスリート→企業人】という移行を果たしていた．

Aは，これを契機に，企業人としての新たな自分づくりに着手した訳だが，この時，アイデンティティ再体制化の手がかりとなったのは「尊敬する先輩」であった．彼もまた同じ金メダリストという経歴を持ち，企業人としての成功を納めていた．彼と自分との影を重ね合わせることで，企業人としてのアイデンティティを強めていったようである．つまり，そこでのアイデンティティ再体制化は『アスリート→尊敬する先輩と同じ自分』という組み換えが行われていたといえよう（図３参照）．この先輩が突然死去したときには，Aは「俺は一体，この先どうすればいいんだ」と，自己の存在意義に疑問を感じている．このことからも，Aの志向性や行動の方向性が，この先輩を拠りどころとしていたことが伺われる．

次に，Bも高校時に種目を転向した当初から「オリンピック出場」を目標とし，「アスリートとしての自分」を確立していった．そして，この目標が達成され，益々，アスリートである自己が強化されていった．その後，重要な試合での敗北体験を契機として「国内タイトルを制覇する」ことを目標として掲げ，有終の美を飾るべく，アスリートとしての自分に没頭していった．また，この出来事と時期を同じくして，会社の上司から「スポーツじゃ飯は喰えない」というアドバイスを受けている．これらの出来事を通じて，Bは競技引退を決意し，その後，国内タイトルを制覇したことにより，競技実践の場を退いていった．

また，これに先行する職業決定において，Bはその選定を競技環境を最優先する意図から父親に依存していた．そこでは，自己の適性や将来性を見越したとは言い難い．そして，競技引退を迎えるや否や会社の業務に傾倒していったのである．このように，Bは，競技引退を通じて【アスリート→企業人】という移行を行い，その中では『アスリート→○○会社の自分』というアイデンティティ再体制化を行っていた（図４参照）．

さて，このように両者が競技引退に関連して歩んだアイデンティティ再体制化については，表１に示すような共通のプロセスを見出すことができる．すなわち，①：競技引退のきっかけとなる出来事（敗北体験や重要な他者からのアドバイスへの傾聴），②：アスリートである自分の歩みの再吟味と引退への方向づけ（アスリートであることの有限さの認知と競技引退することの決意），③：競技からの移行（就職もしくは職務への移行），④：職場への傾倒（職場における地位の確立），という過程である．

両事例の場合，競技引退を決意し，これを果たしていくプロセスの中で，アスリートである自分の歩みを再吟味した上で，再び競技への傾倒を強化していくという特徴が認められた．そして，引退後の生活を見通すことなく，競技からの移行を果たしていっている．

こうして両者は，競技引退を通じて，極めてスムーズな移行を体験したと判断できる一方で，充分な課題解決がなされていないことが危惧された．

2) 社会化予期と時間的展望について

両者にとって【アスリート→企業人】という移行体験はスムーズに果たされていた．しかし，その裏では，先述の通り競技引退に含まれる課題が

充分解決されていなかったのでは，と捉えることができる．

Aの場合，尊敬する先輩の「仕事でも金メダ

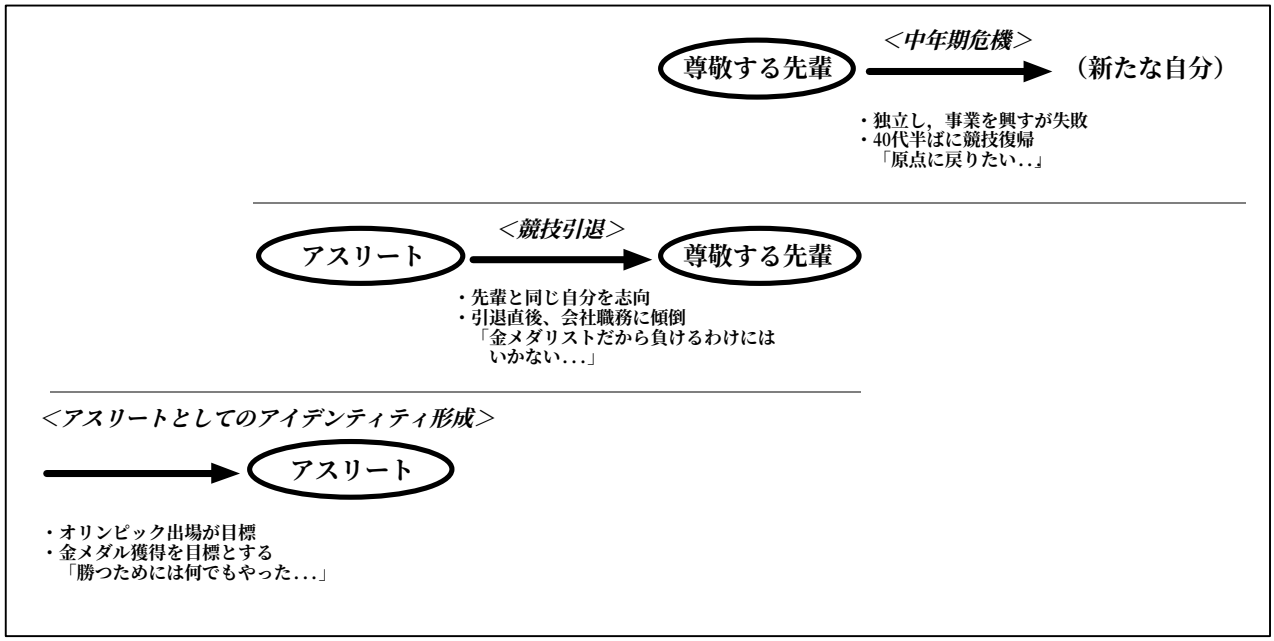

図３：事例Ａのアイデンティティ再体制化とその内容

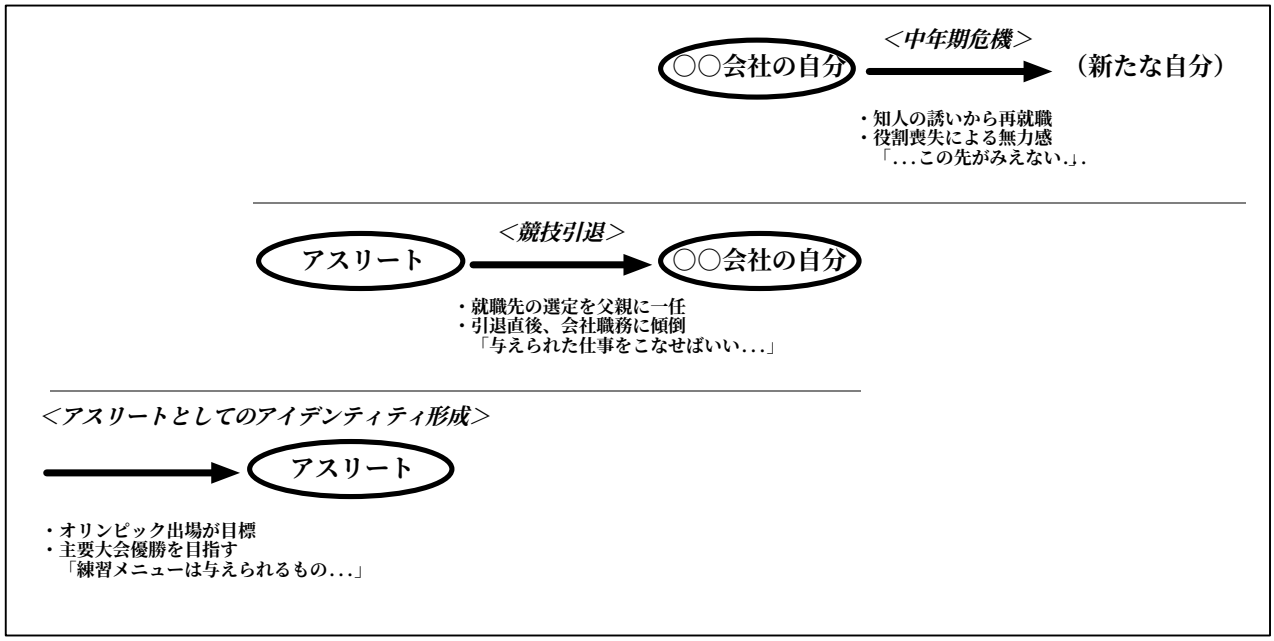

図４：事例Ｂのアイデンティティ再体制化とその内容

表１：競技引退に伴うアイデンティティ再体制化の過程

段 階	名　　称	事例内容との対応
①	競技引退の きっかけとなる出来事	敗北体験，重要な他者からのｱﾄﾞﾊﾞｲｽへの傾聴
②	ｱｽﾘｰﾄである自分の再吟味と引退への方向づけ	ｱｽﾘｰﾄであることの有限さの認知と引退することの決意
③	競技からの移行	就職もしくは職場への移行
④	職場への傾倒	職場における地位の確立

ルを」というアドバイスを，一方，Bの場合であれば，上司の「スポーツでは飯は喰えない」というアドバイスを，それぞれきっかけとして競技引退を決意していた．これらのことから，「もうこれ以上，競技を継続することはできない」という社会化予期によって，引退行動が促進されたと考えられる．競技引退に関連した適応問題に焦点を当てている研究の中では，自らが引退することを予期できのたか，もしくは予期できなかったのかが，その後の適応に大きく影響するとされている[3)]．本研究においても，社会化予期はアスリートから次の生活への移行のスムーズさに貢献していることが明らかとなった．

また，競技期において両者は，それぞれ「オリンピック出場」を目標としており，見通しを立てて競技に取り組んでいた．しかしながら，これより先の人生を具体的に展望する機会をもってはいない．実際，両者が競技引退を通じて体験した時間的展望は，A：「ただただ仕事を頑張ればいい...」，B：「とにかく与えられた仕事を一生懸命にこなす...」というように，仕事への傾倒には，見通しが伴われてはいない．

なぜならば，A は，職場への移行の際して，尊敬していた先輩と自分との影を重ねていた．つまり，そこで行われた職業選択は，いわば，「尊敬していた先輩と同じ自分」を達成したに過ぎなかったのではないだろうか．従って，それまでの自己の歩みを吟味し，自らの将来性を考慮した上での移行ではなかったのであろう．

また，B も既に勤務していた職場を通じての将来を見通した訳ではなかった．加えて，それに遡る職業選択においても父親に一任し，決定を下しており，自らの適正や方向性を考慮した上でのこととは言い難い．

つまり，両者は，競技引退に際して，自己のそれまでの歩みを吟味するものの，これが競技領域にとどまってしまっていたことがわかる．また，そこでは，競技引退までを見通しており，その後の社会生活については充分考慮されてはいなかった．こうして両者は，職務に傾倒していったきらいが認められる．

このことから，両者は，競技引退を通じて直面すべきアイデンティティ再体制化において，アスリートではない自分を再吟味し，充分な見通しを持ちつつ対処した訳ではなく，移行後の状況に傾倒していったといえる．そこには，いわば「スムーズに移行を果たしたものの，充分な課題解決がなされていない」状況が認められた．つまり，充分な時間的展望を伴った移行とは言い難く，そこで解決すべき発達的課題が積み残されてしまっていたのではないかと危惧された．

3) 競技引退体験が中年期危機に与えた影響

両者は，調査時点において深刻な中年期危機を経験していたことが伺われる．

Aは，事業の失敗から多大な責務を負い，社会復帰を切望するという状況下で，競技に復帰した．このことが自信となり，「一社会人としての信頼をなんとか回復したい」「自分にだって何か人の役に立つことが出きるはずだ」と，社会への関わりを益々積極的に持つようになっていった．

Aの場合，中年期危機に際して，内面的に模索の状態にあることが伺われる．競技引退から社会生活への移行は極めて適応的であり，企業人としての成功も納めていた．しかしながら，重要な意思決定場面において，「尊敬する先輩」に依存していたことが認められる．実際，彼の死去によるアイデンティティの揺らぎを体験しており，その迷いの最中に独立し，事業を興した．しかし，これが失敗に終わる．本研究で捉える深刻な中年期危機には，この時期に直面している．にわかに重要な意思決定が求められるこの場面において，本人が出した結論は「競技への復帰」であった．本人がいうように「原点に戻る」という内的な作業が，そこには含まれていた．加えて，移行後の取り組みも，「金メダリストだから...」とアスリートであった従来の信念を補強するにとどまって

おり，青年期・成人期を通じて早期完了[注1)]の状態にあったAが，ようやくモラトリアム[注2)]の段階に入ったことが伺われよう（図３参照）．

一方，Bは再就職を余儀なくされ，「この会社が自分の求めているものは何もないし，自分も会社に求めていることは何もない」「やる気が起こらない．今が人生最大のスランプ」と，いわゆる失業鬱の最中にあった．

Bにも，Aと同様，発達段階の比較的早期から，主体的な意思決定の体験のなさが認められる．高校入学と同時に種目転向をしたのは，厳格な父の薦めであったこと，練習メニューはコーチから与えられるモノであり，創意工夫をして練習に臨んだことがなかったこと，父親の薦めによって就職を果たしていること，指導者の思い通りの選手を育てようとするコーチングスタイルであったことなどが，その裏づけとなろう．それぞれの場面では，多大なる傾倒が認められるが，重要な意思決定場面に主体性が認められない．これが，再就職後の職場での対処様式に反映されているのではないだろうか．加えて，「フェアーな会社だと思って...」と移行後の取り組みも，アスリートであった従来の信念を補強するにとどまっている．これらのことより，Bは中年期に至るまでの内面は早期完了[注1)]の状態にあり，中年期危機に直面して，拡散状態[注3)]にあることが伺われる（図４参照）．

以上の結果から，競技引退をを通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化は，中年期危機に直面して，再び問い直されていたと考えられる．青年・成人期を通じて早期完了の状態にあった両者は，競技引退に際して，将来に向けた自己のあり方を主体的に選び取っていく姿勢を獲得してはおらず，その後の新たな危機場面に直面した際に，深刻な問題へと発展してしまったのであろう．

5-4. まとめ

本研究は，競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関連して，元アスリートがどのようなプロセスを辿ったのかを明らかにし，その中で，社会化予期と時間的展望がどのような役割を果たしているのかを明らかにした．そして，そこでの体験が，その後の人生における危機場面に対して，どのような影響を与えるのかを検討した．

中年期危機を体験した元オリンピック選手から，以下のような結果が得られた．

1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化は，①：競技引退のきっかけとなる出来事，②：アスリートである自分の歩みの再吟味と引退への方向づけ，③：競技からの移行，④：職場への傾倒，というプロセスを辿っていた．両事例の場合，競技実践から新たな社会生活への移行がスムーズであっても，充分な課題解決を伴っていない場合が危惧さた．

2）社会化予期は，競技から新たな社会生活への移行を助長し，一方，時間的展望は，アイデンティティ再体制化における課題解決の程度を決定づける．

3）競技引退を通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化によって積み残された課題は，中年期危機に直面して，再び問い直されていた．

これらの結果から，競技引退を通じて体験されるアイデンティティ再体制化の中では，これ以上競技継続できないことに予め気づき（社会化予期），将来に向けた自己のあり方を主体的に選び取っていくこと（時間的展望）が望ましいのではないかと推測された．なぜならば，それは，来るべき新たな発達的危機に対して，有効な対処資源となると考えられるからである．

注

1) Marcia[10)]の類型によると，以下の通りである．
早期完了(foreclosure)：危機の体験がなく，現状への積極的関与が認められるタイプ．つまり，自分の目標と親の目標との間の不協和がなく，ど

んな体験も青年期までの信念を補強するのみであり，融通のなさが特徴.

2) モラトリアム(moratorium)：現在，危機の最中にあり，自分らしさを求めて積極的関与しているタイプ．つまり，いくつかの選択肢に迷っているところで，その不確かさを克服しようと一生懸命に努力している.

3)アイデンティティ拡散(identity diffusion)：危機前と危機後の２タイプに分類されるが，いずれも積極的関与が認められないタイプ．つまり，自分が何者であるかが特定できない状態.

文　献（Reference）

1) Botterill, C.(1981), What “ending” tell us about “beginnings.” In T. Orlick, J. Partington, & J.Salmela (Eds.), Mental trainning for coaches and athletes. Fitness and Amateur Sport : Ottawa , pp.164-165.

2) Broom, E. F. (1981), Detraining and retirement from high level competition : A reaction to “retirement from high level competition” and “Career crisis in sport.” In T. Orlick, J. Partington, & J.Salmela (Eds.), Mental trainning for coaches and athletes. Fitness and Amateur Sport : Ottawa , pp.183-188.

3) Crook, J. M. & Robertson, S. E. (1991), Transition out of elite sport. International Journal of Sport Psychology : 22: p.115-127.

4) Erikson, E.H.(1959), Identity and the Life Cycle. Psychological Issues, No 1. International Universities Press : New York. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性-アイデンティティとライフサイクル- 誠心書房 ： 東京)

5) Gorbett, F. (1985), Psycho-social adjustment of athletes to retirement. In L. K. Bunker, J. A. Rotella, & A. S. Rally (Eds.), Sport Psy-chology: Psychological considerations in maximizing sport performance. Mc-Naughton & Gunn : Ann Arbor, MI.

6) Gordon, S.(1995), Career transiton in competitive sport, In T. Morris & J. Summers(Eds.), Sport Psychology: Teory, application and Issues. Wiley : Qld, pp.474-501.

7) Grove, J. R. , Lavalee, D., & Gordon, S.(1997), Coping with retirement from sport : the influence of athletic Identity. Journal of Applied Sport Psychology: 9, p.191-203.

8) 金子雅臣(1996)失業の心理学，築地書館：東京

9) Lewin, K. (1951), Field theory in social science. Harper & Brothers : New York. (猪股佐登留訳 1979 社会科学における場の理論 誠心書房 ： 東京)

10) Marcia, J.E.(1964), Determination and Construct Validity of ego Identity status. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University.

11) Murphy, S.M.(1995), Transition in com-petitive sport; Maximizing indevidual potential. In Shane M. Murphy(Eds.), Sport psychology interventions. Human Kine-tics : Champaign, IL, p.331-346.

12) Murphy, G. M. , Petitpas, A.J., & Brewer, B.W.(1996), Identity foreclosure, athletic identity, and career maturity in inter-collegiate athletes. The Sport Psychologist : 10, p.239-246.

13) 岡本祐子(1985)，中年期の自我同一性に関する研究．教育心理学研究，33，p.295-306.

14) 岡本祐子(1986)，成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析．教育心理学研究，34，p.352-358.

15) 岡本祐子(1995)，中年期の職場不適応事例にみられたアイデンティティ危機とその再体制化．心理臨床学，13(3)，p.321-332.

16) Orlick, T.(1980), In pursuit of excellence.

Coaching Association of Canada : Ottawa.
17) 豊田則成・中込四郎(1994)，競技引退における「同一性再体制化」のタイプとその特徴-元学生競技者を対象として-．日本体育学会第45回大会号．
18) 豊田則成・中込四郎(1996)，運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって．体育学研究，41(3)，p.192-206．
19) 豊田則成・中込四郎(1997)，プロサッカー選手のキャリア移行の実態．日本スポーツ心理学会第24回大会研究発表抄録集．
20) Ungerleider, S. (1997), Olympic athletes' transition from sport to workplace. Perceptual and Motor Skills: 84, p.1287-1295.
21) Waterman, A.S. (1982), Identity develop-ment from adolescence to adulthood : An extention of theory and a review of reserch. Developmental Psychology, 18, p.341-311.
22) Werthner, P. & Orlick, T (1986), Retirement experiences of successful olympic athletes. International Journal of Sport Psychology : 17, p.337-363.

本研究の一部は，平成10年10月 日本体育学会 第49回大会，及び，平成10年11月 日本スポーツ教育学会第18回大会において口頭発表され，「アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究-中年期危機を体験した元オリンピック選手-」スポーツ教育学研究19, 117-129.（1999）において論文発表された．

アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究
- 中年期危機を体験した元オリンピック選手 -

要　約

本研究の目的は，競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関連して，元アスリートがどのようなプロセスを辿ったのかを明らかにし，その中で，社会化予期と時間的展望がどのような役割を果たしているのかを同定し，そして，そこでの体験が，その後の中年期危機に対して，どのような影響を与えるのかを検討することにある．中年期危機を体験した２名の元オリンピック選手に対して，それぞれ半構造化面接が実施され，以下のような結果が得られた．1）競技引退に伴うアイデンティティ再体制化は，Ⅰ：競技引退のきっかけとなる出来事，Ⅱ：アスリートである自分の歩みの再吟味と引退への方向づけ，Ⅲ：競技からの移行，Ⅳ：職場への傾倒，というプロセスを辿っていた．2）社会化予期は，競技から新たな社会生活への移行を助長し，一方，時間的展望は，アイデンティティ再体制化における課題解決の程度を決定づける．3）競技引退を通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化によって積み残された課題は，中年期危機に再び問い直されていた．

A study on ego identity reconfirmation in the athletic retirement
- The cases of former Olympians experienced the middle-age crisis -

Abstract

The purposes of this study were to analyze the process of ego identity reconfirmation in the athletic retirement, to identify the roles of anticipatory socialization and time perspective in the process, and to examine the effect of retiring experience for the middle-age crisis. Subjects were two former Olympians who had experienced the middle-age crisis. Several semi-structured interviews were done to each of them. The following 3 points were suggested. 1)Four stages were found in the process of ego identity reconfirmation in the athletic retirement ; Ⅰ: the onset of taking account of his/her athletic retirement, Ⅱ: reconsideration of his/her life as an athlete and choosing his/her course toward athletic retirement, Ⅲ: transition from athletic activity, Ⅳ: active commitment into his/her workplace. 2)Anticipatory socialization encouraged to transfer to the next stage of life, and time perspective was a major indicator for the degree of resolution of the developmental tasks in ego identity reconfirmation. 3) Unresolved tasks with ego identity reconfirmation on the athletic retirement were brought up again in middle age.